平成キリシタン物語

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平成キリシタン物語

【Ｎコード】
Ｎ６９８６Ｋ

【作者名】
抹茶小豆

【あらすじ】
諏訪（すわ）　御国（みくに）は隠れキリシタンの末裔の１７歳。
家族親族、村人合わせての筋金入りのクリスチャンに囲まれて生活している。しかし本人はそんなお堅いクリスチャンたちに辟易としている。
そんなとき、村の教会の牧師の息子、英知から告白され…？

しがらみ

これがあたしの名前の由来なんだって。

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりは右に、ひとりは左に。

そのときイエスはこう言われた。「父よ彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」彼らはくじを引いて、イエスの着物を分けた。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪行を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。

ところがもうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「お前は神をも恐れないのか。お前も同じ刑罰を受けているではないか。

われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は悪いことは何もしなかったのだ」

そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」

イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」

〈新改訳聖書　ルカによる福音書より引用〉

「諏訪御国」これで「すわ　みくに」と読む。なんとも厳しい名前

で、あたしはあんまり好きじゃない。
御国とはイエスが説いてまわった「神の国」俗に言う「天国」「パラダイス」っていう意味。
あたしの父は…っていうか、家族、親戚、いや、あたしの住んでる村全体がキリシタンの村で、遡れば江戸時代のキリシタン弾圧の時代、迫害を逃れてこの場所に移り住み、以来秘密裏にキリスト教を信じ続けたという筋金入りの一派なのである。
しかも我が家は庄屋（いわゆる村長さんね）で、蔵には由緒正しき（？）マリア観音だのバテレンのイコンだのがわんさかあって、時々歴史家の人が尋ねてくるような家。

父は当然熱心なキリスト教徒で、毎朝5時から行われる教会の早天祈祷会も欠かさない。
品行方正で温和な父と専業主婦の優しい母親。
父と母が言い争う声など生まれてこのかた聞いたことがない。
絵に描いたようなクリスチャンホーム。
しかし、あたしはそんな家庭が少し重苦しい。

「ね、だからイエス様は水を葡萄酒に変えるという奇跡を行われたの」

新約聖書のヨハネ伝に書かれている『カナの婚礼』という有名な話で、イエスが親戚の結婚式に招かれた際に葡萄酒が足りなくなり、水を葡萄酒に変えたというアレね。
教会のジュニアクラスで、あたしは些かうんざりする。
幼児科や初等科にいたころは、そんな話も目をキラキラさせて聞いたものだが、今やあたしも高校生となり、それなりの物事の分別はつく。
しかし、ジュニアクラスの担当教師である竹内さんは目をキラキラさせて語り続ける。

――――いけない、この目はマジだ――――

あたしは素朴なツッコミを飲み込んだ。
隣で英知君が知的オーラ全開でメガネをくっと上げる。

「竹内先生の解釈も、もっともですが、僕はその逸話をこう解釈します。空になった壷、それは自分自身という器を指し、自身のすべてを神に捧げつくし、空っぽになって初めてそこに神の愛がそそがれるのだと」
竹内先生の顔が綻ぶ。
「まあ、さすが英知君は牧師先生の息子なだけあって、素晴らしい解釈だわ」
英知君はこの村の教会の牧師先生の息子で、あたしより１つ年上の１８歳だ。いささか神経質そうな目元に知的なメガネをかけている。田舎の教会ということもあり、教会に集う人数はせいせい２０から３０名ほどで、あたしの属するジュニアクラスなぞ、あたしと英知君の２人しかいない。

まじまじと英知君を見つめると、気のせいかうっすらとその頬に赤みが差したような気がした。

「で、御国ちゃんは今日のお話を聞いてどう思いましたか？」
「え…っと、水が葡萄酒に変わってすごいなって思いました」
自分で言って、なんだか悲しくなってきた。小学生でももっとまともな感想いえるぞ？
隣で英知君も苦笑している。

毎週日曜日は教会へ行って、全体の礼拝に出席してその後にこのジュニアクラスに出て、お昼ご飯を食べて帰るのが日課となっている。

今日は婦人会の滝さんの担当で、ビーフシチューとサラダだった。
「うん、絶品」
半分これで教会に来てるようなもんだ。
そしてもう半分は親への義理。

「ねえ、御国ちゃん聞いた？」
テーブルをはさんで、吉田のおばちゃんが座る。
「舘先生とこの英知君ねえ、東京の大学の神学部に進むんだって」
ここだけの話をあちこちでする典型のおばちゃん、吉田夫人が囁く。
「ふ～ん」
あたしは気のない返事をひとつした。
「ふーんじゃないよ、あんた私ら婦人会でいつもあんたらのこと祈ってるんよ。英知君は東京の大学に行くけど、将来この教会の牧師になるでしょ？そしたらその嫁が必要だわねぇ。この教会、他に似合いの年恰好の娘っったら、あんた以外におらんでしょうが」
一瞬口に含んだビーフシチューを吹きそうになった。
「はあ？」
「何事も自給自足が大切なんだわ～きひひ」
ふざけんな！とテーブルを星一徹してみたい衝動に駆られた。

食べ終えた後も、むかむかとした気持ちが治まらない。
あたしはひとり礼拝堂で祈るふりをしていた。
「冗談、なんであたしがあんな面白みのない男と結婚しなくちゃなんないわけ？」
まっぴらごめんと中央に据えられたキリストの磔刑の像にこっそり「あっかんべー」をした。
だいたいキリスト教なんて、２０００年も前のユダヤの出来事でしょ？平成の日本を生きるわたし達には思想が古すぎるっつうの！
「水を葡萄酒に変えただの」って本気で信じてる人の気が知れない。
そう思ってぷうと口を膨らませた時だった。

「あの、御国ちゃん。ちょっといいかな」
背後に英知君が立っている。
「ん？なに？」
あたしは何気に振り返ると、英知君は茹蛸になっている。
「み…御国ちゃん、僕君のことが…す、好きなんだ！
知ってると思うけど、僕もうすぐ東京に行っちゃうから、それで思い切って…」

好青年だとは思う。でも正直好みじゃない。

「気持ち、手紙にしてきたから読んで」
そういって英知君は背を向けて走り出した。

あたしは手の中の手紙、を持余す。
17歳のあたしにとってそれはいたしかたのない事だったのかもしれない。

あたしは手紙を読まなかった。
夕方、庭にいるあたしに母が声をかける。
「御国、なにしてるの？」
「うん、ちょっとね」
「冷えてきたから、早く家にお入りなさいな」
「うん、すぐにいくよ」

母の背を見送ってあたしは鼻歌を歌う。
「白山羊さんからお手紙ついた、黒山羊さんたら読まずに焼いた…」

英知君のくれた可愛い白い封筒は炎に包まれ、一瞬痛みにのけぞるようにして灰になった。

彼の想いとともに、空っ風が灰をコバルトブルーの空に舞い上がらせた。

虚飾

純和風の我が家に、改装工事がはいったのは数年前。
なのでリビングは、ばっちり床暖房でぬくぬくなわけだ。
夕食後、あたしは今日発売の１０代の女の子雑誌「Ｃｕｔｅ」を愛読していた。
お母さんは夕食の後片付けで、お父さんは隣で歴史小説を読んでいる。

少し前にこの雑誌で特集されていた、癒し系のロングヘアを目指して伸ばしはじめたあたしの髪は、ようやく肩甲骨に届くようになったのだが、今月は春を意識したイメチェン特集が組まれていた。

『え？ロングヘアーですか？なんだか重たい気がして、そうですね、僕は断然活発なショート派です』

今をときめくイケメンモデルに、それらしく流行の女性について語らせる企画なのである。

時代の流れ（ってちょっとオーバーか…）にいささかショックを受けつつ、あたしはお母さんに切り出した。

「ねえ、お母さん。あたし髪を切りたいのだけど」
お母さんは水仕事の手を止めて、あたしを振り返った。
「まあ、せっかくそこまで伸ばしたのに、なんだかもったいないわね」
と残念そうな顔をする。
そうするとあたしもなんだか、髪を切るのが申し訳ないような気がしてきた。

「うんと…じゃあ髪はもう少し考えようかな」
「そうね、とてもきれいな髪なのだし、今のロングヘアもお母さんはとても似合っていると思いますよ」
と言ってにっこりと微笑んだ。

翌日、やっぱりクラスの女子の話題は「Ｃｕｔｅ」の特集についてだった。
同じ仲良しグループの真紀が、トイレの鏡の前で徐に口紅を取り出すと、
「え？それって、『Ｃｕｔｅ』で特集されてた新色じゃん」
由香があざとくそれを見つけた。
「そうよ、これ売ってるお店、なかなか無くて見つけるの大変だったんだから」
女子トイレは、貴重なおしゃれの情報交換の場所でもある。
真紀はあたしたちのグループのリーダー的存在でもあり、目鼻立ちの整った派手な美人タイプで、当然流行にもすごく敏感だった。
悔しいけど、春色の新色の口紅は真紀にすごく似合っていた。

「え～、いいなぁ、で、どこで売ってるの？」
由香が物欲しそうな声を出すと、真紀は満足気に微笑んだ。
「ん？教えな～い」
優越感丸出しの笑み。

真紀はバッグからヘアアイロンを取り出すと、コンセントに差し込んであたためはじめた。
栗色の長い髪が、巻き毛に変わると、真紀がなんだか本当のお姫様のように思えてきた。

真紀は念入りに身だしなみを整えると、

「今日、これから沢口君とデートなんだ。だから…あとの掃除お願いね」
とにっこりと微笑み、ひらひらと手を振り出て行った。
「なにあれ、みくが沢口君のこと好きって知ってて、わざとだよ」
意地悪気に由香が鼻の頭に皺を寄せる。
「みく、かわいそ～」
普段は大人しい智美が、そっとあたしの手を握った。
「あはは、やだなあ。あたし別に気にしてないよ。真紀は美人だし沢口君とお似合いだと思うよ。うん。こうなったらみんなで真紀のこと応援しようよ」

――――あたしは、自然に笑えているだろうか――――
震える指先にぐっと力を入れた。

皆と別れてあたしは駅前の百貨店に向かった。
『Ｃｕｔｅ』で特集されていた新色のコスメが、ショーウィンドウに飾られてある。
真紀がつけていた口紅は
「４８００円かぁ」
バイトをしていない高校生には、幾分厳しい値段である。
ガラスケースに映るあたしの物欲しげな表情に、真紀の勝ち誇った顔が交差した。

「すいません。この口紅ください」
気がついたらそう言っていた。
あたしのお財布の中には５０００円札が入っていた。
本当は参考書を買うからと、お母さんに貰ったお金だった。
――――だって、この口紅はあたしのステータスなんだもの――――
――――真紀になんて、負けたくない――――
お母さんに対する後ろめたさに、必死で言い訳をしているあたしが

いた。

「ただいま当社の化粧品をお買い上げいただいたお客さまには、メイクの無料サービスを実施しておりますので、よかったらいかがですか？」

店員が愛想よく微笑みかけてきた。。

あたしはそのサービスを受けることにした。

――――本当は鏡に映る自分の顔がキライ――――

――――ううん、嫌いなのは顔だけじゃなくて全部――――

店員があたしの眉毛をチョンチョンと器用にカットし、整えてゆく。

「あっ彼女この化粧水ね、新商品なんだけど鮫の軟骨から抽出した天然コラーゲンがたっぷり入っていてお肌が、ほら見て、ぷるんぷるんになるでしょう？」

５０代くらいだろうか、やり手の販売員っぽいスタッフが、瞳孔が開いた目で鏡越しのあたしの目を見つめ『ね？』と凄むのには、多少気圧された。

「肌のお手入れはね、若いうちからやんなくちゃだめ、定価は６８００円なんだけど、期間限定で今なら５８００円で販売してるのよぉ～、いかがかしら？」

しかし、さすがにそれは断った。

販売員のおばちゃんは、驚愕の表情を浮かべ、まるでこの世が終わるかのように残念そうである。

「そお、残念ね、こんなチャンスは二度とないから！」

この商品を買わないと、あたしは死ぬんだろうか…もしくは呪われる？そんな気がしてきた。

しかし巧みな話術とともに、手早くメイクを施していく様はさすがにプロだと実感した。
キリっと整えられ眉に、目元を強調するアイライン、ブルーのアイシャドウでクールさをアピールしたのだという。

そこにはいつもと違う少し大人のあたしが映っていた。
「どお？」
「はい、気に入りました。ありがとうございます」
あたしは満足気に鏡の中のあたしを見つめ、メイクをしてくれた店員にペコリと頭を下げ、売り場を後にした。
いつもと違うあたしの顔に、少しだけ自信を持てたような気がした。

バス停でバスを待っていると、くりくりの坊主頭の少年が猛烈な勢いで駈けてくる。
「みぃくぅ～～～～～～～～！！！」
少年は存分に助走をつけ、あたしの前でバビョ～ンとジャンプし、首っ玉に抱きつくと、足でがっちりあたしの体を挟み込んだ。
これぞ少年が編み出したいわゆる『カニ鋏み』の進化系、『カニ鋏み抱っこ』なのである。
「ちょ…三太、重い…恥ずかしい…やめて」
彼は同じ教会の教会員さんの息子なのであるが、１２月２４日のクリスマスイブに生まれたので、サンタクロースのサンタとかけて三太と名付けられたのである。
なぜだかあたしは幼少期からこの三太に異様なほど慕われている。

三太があたしの顔をまじまじと覗き込んだ。
「みく、お前化粧しとるんか？」
「そうよ、似合うでしょ」
あたしは得意気に胸を張って見せた。
「なんだか妖怪人間ベラみてぇだな」

そのとき小学一年生の三太には、悪意というものが全くなかった。
それが彼にとって見たまんまの素直な感想だったのだろう。
それゆえに救いようがない…。

「だ…だれが妖怪だ！失礼なっ」
「何を怒っとるんじゃ？みくに」
心頭怒髪するあたしに、三太は目を白黒させている。

「そんなことより、聞いて。オレな今度の教会の復活祭（イースター）の子供劇で主役をやることになったんじゃ」
復活祭（イースター）ってのはキリストの復活を祝う行事で、春分後の満月直後の日曜日に行われる祭事なのだ。だから毎年その日にちは異なる。
聖誕祭（クリスマス）と同じくらいキリスト教会にとっては大切な行事なのだが、日本では聖誕祭（クリスマス）ほどは浸透していない。
しかし一般的に宗教的に重要なこの祭事にかこつけて教会では、伝道集会や祝会などの特別なプログラムが組まれることが多い。
うちの教会では毎年劇をやる。
うちの教会は人数は少ないのだが、教会員にもと劇団員の方がいて、その人の指導のもとに公民館を借り切ってのかなり大掛かりな劇を上演することになっている。
演じるのは子供たちなんだけど、それなりに見応えがあり、密かにあたしも毎年楽しみにしている。
「すごいじゃん、三太。で演目は？」
「『たいせつなきみ』で、オレが主役のパンチロネなんじゃ」
三太が誇らしげに胸を張る。
「みく、絶対見に来てくれな！」
「わかったよ、楽しみにしてる。三太がんばれ！」
笑顔で三太とバイバイすると、さっきまでのむしゃくしゃは嘘みたいにどっかに行っていた。

あたしは伸びをひとつする。
やっぱり今日はバスに乗らずに歩いて帰ろ。
帰宅するなり、お母さんがびっくりしたように目をしたたかせた。
「御国？」
そしてあたしは気付く。
メイク落とすの忘れてた。
そしてあたしは、参考書を買わず、口紅を買ってしまったことを正直にお母さんに白状する事態となった。とほほ。
お母さんは少し悲しそうな顔をしたが、決して咎めたり、否定したりはしなかった。
「そうね、御国も年頃なのだし、そういうものに興味を持つわよね。いいわ、じゃあ今回はお母さんから御国へのプレゼントってことにするわ」
「本当？ありがとうお母さん」
そういってあたしはお母さんに抱きついた。
「でもね、御国、あなたはまだ１０代でへたにお化粧なんてしなくたって、そのままで充分美しいのよ」
お母さんの優しい手があたしの顔を包み込む。
入浴後、鏡に映る自分の顔を見て、あたしは愕然とした。
――――　ない　――――
あたしの眉毛がない。
正確には眉毛の真ん中半分がカットされ、遠目には薄ぼんやりとした平安時代の麻呂みたいになってる。
次の日から、あたしはクーピーの焦げ茶色で、せっせと眉毛を書き

足す破目に陥ったのであった。

子供劇

英知君は復活(きょう)祭を待たずに東京へ行ってしまった。
それは多分あたしのせい。
どこか麻痺した罪悪感とともに、少しほっとしているあたしはかなり最悪な人間だと思う。
なんてことを考えながら、あたしは重い足取りで、三太が出演する子供劇の会場に向かった。公民館とはいえ、舞台を備えた本格な造りで、ちゃんとライトや音響も完備されている。
あたしは前から3列目の中央に、どっかりと陣取った。
受付でもらったプログラムの目を通す。
演目は『たいせつなきみ』。
この物語はもともとマックス・ルケードというひとが書いた絵本を子供劇用にアレンジしたものであるらしい。

客の入りは上々で、開演の１０分前にはほぼ満席の状態だった。
やがて客席の明かりが消え、開演のブザーとともに幕が上がる。
メルヘンチックな音楽と共に、カラフルな衣装に身を包んだ子供たちが舞台に登場する。

『あるところに、ウィミックという木彫りの人形たちが暮らしていました。このウィミックの人形たちはみんなエリというとても腕のいい木彫り職人によって作られたのですが、実はこのウィミックの村のみんなが、今とっても夢中になっていることがあります。
それは…――――――』

ナレーションのあとで上手から、愛らしいピンクのドレスを着た女の子が登場する。
「やあ、君はとても可愛いね。最新のファッションに身を包み、み

んなの憧れの的だ。
そんな君にこそ、この星のシールが相応しい」
そういってウィミックの村人たちが次々に彼女を賞賛し、金色の星の形をしたシールを彼女に貼り付けていった。

すると今度は下手から、メガネをかけて、分厚い本を読みながら、また別のウィミックが登場する。
「やあ、君は我々の村で一番頭の良いウィミックではないか！」
村人たちが、次々に彼を賞賛する。
「そんな君にこそ、この星のシールが相応しい」
そいって今度は彼に星のシールを貼り付けていく。
星のシールを貼り付けてもらったウィミックは誇らしげに、エヘンと胸を張る。
そして今度は互いに、自分が何枚の星のシールをもっているかを自慢しあった。
そこに、灰色の醜いシールをたくさんつけた、三太扮するパンチロネが登場する。
「あ…あの…」
「なんだお前は。風体のぱっとしない奴だな」
ウィミックの村人がじろじろとパンチロネを見つめる。
「あっ見てみろよ、こいつ星のシールをひとつも持っていないぞ！」
そして、皆がパンチロネをあざ笑う。
「わ…笑わないでくれよ、だけど僕だって星のシールが欲しいんだ」
「そうかよ、じゃあお前も何か皆があっと驚くすごいことをやってみな！」
そのとき、隣にいたウィミックが勢い良く手を上げる。
「はい、はい、はーい！実はわたくし、とっても足がはやくて、駆けっこなら誰にも負けたことがありませーん！なので、あなたわたくしと駆けっこの勝負をしなさい、そしてもしあなたが勝ったら、この星のシールをあげましょう」

「う…うん、わかったよ」
「そお、じゃあこの岩からスタートして、あそこの木がゴールね。よーい、どん」

しかしパンチロネはスタート地点で転んでしまう。
「あいたた…」
「おやまあ、あなたという人はなんとドジなのでしょう」
「お前、なんにもできないんだな。あきれちゃうぜ」
「うふふ、そんなあなたには星のシールより、この灰色のだめ印シールがお似合いだわ」
皆は笑いながら、容赦なくパンチロネに灰色のシールをはりつけていった。

『皆に笑われ、バカにされ、パンチロネはとても悲しい気持ちになりました
そんなある日、パンチロネはある少女と出会います。
不思議なことにこの少女には星のシールも灰色のシールもなにひとつついていないのです』

「ねえ、君の名前は？」
そんな少女に興味をもったパンチロネが彼女の名前を尋ねた。
「ルシアよ」
「ねえ、ルシアどうして君にはシールが一枚もついていないんだい？どうしたら君みたいになれるんだろうか？」

「その答えが知りたければ、あなたは丘の上に住んでいるエリに会ってみるといいわ。エリはわたしたちウィミックを作ってくれたのよ」

『パンチロネはエリに会いたいと強く思いました。しかし…』

「エリはちゃんと僕に会ってくれるだろうか。こんな灰色のシールだらけの僕が会いにいったら、がっかりしちゃうんじゃないだろうか」
パンチロネはとても悲しく重い足取りで、丘の上のエリの家を目指した。
しかし、エリはパンチロネが自分に会いにやってきたのを知り、家を飛び出して迎えに行き、パンチロネをしっかりと抱きしめた。

「ああ、よく来たね。パンチロネ」
エリがよく見ると、パンチロネには灰色の醜いシールがたくさん貼られている。
「しかし、お前さんこれは一体どうしたんだ？」
パンチロネはウィミックの村で皆が夢中になっている、シールのことを話した。
「だけど、僕はとっても駄目なウィミックで何をしてもドジばかりなんだ。そして皆にこのシールを貼り付けられたってわけさ」
「それは、お前さんつらい思いをたくさんしたね。でも、これだけは知っていてくれ、たとえお前さんがどんな姿をしておっても、わしはお前さんを愛しておる」
パンチロネが目を輝かせる。
「エリ…それは本当？僕はこんなにもたくさん灰色シールを貼り付けられた、ダメウィミックなんだよ？こんな僕を、エリは本当に愛してくれるの？」
「ああ、勿論だよパンチロネ。わしはお前の灰色のシールなんかちっとも気にならない。お前さんはわしのたいせつな作品なんじゃ。そのままでかけがえのない存在なんじゃよ」
「やったあ！」
『エリにそういってもらったパンチロネが飛び上がって喜んだ拍子に、パンチロネに張り付いていた灰色のシールが一枚剥がれ落ちま

した』

劇が終わり子供たち全員が舞台の中央に出てきて歌を歌いはじめた。

『君は愛されるため生まれた　君の存在は愛で満ちている
君は愛されるため生まれた　君の存在は愛で満ちている

永遠の神の愛は　我らの出会いの中で　実を結ぶ
君の存在が　私にはどれほど大きな喜びでしょう

君は愛されるため生まれた　今もその愛に満ちている
君は愛されるため生まれた　今もその愛に満ちている』

三太が顔を真っ赤にして、半ば怒鳴るように一生懸命に歌っている。
それはなぜだか心に染み入る光景だった。

――――パンチロネはあたしだ――――
そう思ったら、涙が溢れて止まらなかった。
　あたしは人目をはばからずにその場に泣き伏した。

――――本当の愛が欲しい――――
ひりつくほどにそう願う自分に気がついた。
あたしは両親には、きちんと愛されて育ったという自覚がある。
友達関係もそれなりに上手くやってる自信がある。
だけど、それはあたしが必死で演じている嘘のあたし。
あたしはあたしの本当の醜さを知っている。
そんなあたしを誰にも見せられなくて、本当は心が凍えてる。

愛されたいという強烈な欲求と、こんな自分に愛される資格などないという葛藤が心を裂く。

「ねぇ、神様。本当の愛って…なに？」

誰もいなくなった公民館の客席であたしは膝を抱えてむせび泣いた。

上京

春の復活祭の子供劇で大泣きしたあたしは、夏くらいから教会に行かなくなった。
受験生という身分を逆手にとった、『塾通い』っていうのが、親への大義名分だったけど、本当はそんなに切羽詰ったものじゃない。
塾が終われば普通に友達と買い物したり、カラオケも行ってる。
ただ、復活祭以降、時折どうしょうもなく心がスースーすることがある。
本当はもっと前からあったのかもしれないけど、だから友達とつるんで、はしゃいで、適当にごまかしてる。

秋口にはちゃっかりと推薦で進路を決めた私は、卒業式を終えると東京で一人暮らしをすることになった。
欲しかったのは誰にも干渉されない自由。
あたしを戒める、化石みたいな思想もしきたりもいらない。
あたしの人生はあたしのもの、だから好きに生きる。

な～んてかっこいいことといっても、所詮出所は親のお金なんだけどね。
そしていよいよ明日は旅立ちの日。
大きな期待に胸を膨らませつつ、あたしは幸せな眠りについた。
翌日の昼過ぎにお父さんが車で駅まで送ってくれた。
「がんばれ！お父さんはいつでもお前の味方だ」
普段は無口なお父さんが、そういって暖かく大きな手で頭をくしゃっと撫でてくれた。
一瞬泣きそうになって、あたしは故意に強がっておどけてみせた。
東京駅に着いたときには、もう日が暮れて、小雨が降っていた。

春とはいえ、まだ肌寒い。
ポケットから乗車券を取り出し、改札を抜ける。
地下鉄の切符を買おうを財布を捜したが、見当たらない。
財布の中には新居の鍵や、銀行のカードなんかも入っている。
あたしは一瞬頭が真っ白になって、呆然とその場に立ち尽くしてしまった。
雑踏の中で視界が歪む。
極度の緊張のあまり気分が悪くなって、あたしはその場にしゃがみこんで泣いてしまった。

「どうしました？気分でも悪いのですか？」
親切そうな青年がひとり、そんなあたしに声をかけてくれた。
あたしは涙を拭い顔を上げる。
「御国ちゃん？」
青年は驚愕の表情を浮かべた。
あたしは青年にしがみつき思いっきり泣いた。
「うわっ、ちょっと御国ちゃん」
雑踏の中でいきなり抱きつかれ、英知君は赤面し腰を抜かしそうになってる。

「…君は昔から、そんな感じだよ」
事情を話しあたしが少し落ち着いたところで、英知君は盛大にため息をついた。
「とりあえず、警察と駅のほうに紛失届けを提出して、今日は君はビジネスホテルにでも泊まりなよ。お金は僕が払うから」
「やだっ、ひとりは嫌！お願い英知君一緒にいて」
あたしはむんずと英知君の服の裾を握って離さなかった。
とりあえず不安で、誰かに一緒にいてほしかった。
英知君はポケットから携帯を取り出しどこかへ電話をかけた。
東京駅から地下鉄に乗って、着いた先は英知君が通う日本有数の名

門大学の学生寮。
この大学、偏差値はエライことになってる。
ただし向かった先は女子寮だった。
「すまない、真理（まり）」
英知君は部屋の主に頭を下げる。
真理と呼ばれたあたしより少し年上っぽい女の子は、にこにこと暖かく微笑んでいる。
どこか、感じがあたしのお母さんに似ていた。
「大変だったのね」
飾らない部屋着に化粧っ気のない素っピンの彼女だが、なぜだか傍にいるだけで安心できる雰囲気があった。
「夕飯まだでしょ？英知君も食べていきなよ。まあ冷蔵庫にあるあり合わせのものだけど」
彼女があり合わせの材料で作った即席の焼きうどんは、なぜだか感涙するほど美味しかった。
こんな非常事態なんだけど、優しく暖かく、それはなぜだか幸せな時間だった。
みんなで他愛ない話をして、お互いに笑いあって。彼らの優しさに触れると何を気負うことなく素の自分でいられて。
あたしはそんな真理さんが大好きになった。
真理さんは英知君の彼女なんだろうか？英知君は「真理」なんて呼び捨てにしていたし。
なんてことが頭の片隅に過ぎったが、なんとなく聞き出せなかった。
寮の門限が迫る頃、
「明日の朝また迎えにくるよ」
と言って英知君は男子寮へと戻っていった。
「あの、見ず知らずのあたしによくしてくださって、本当にありがとうございます」
真理さんと二人きりになって、あたしはおずおずと真理さんにお礼をいった。

「えっと…やだなあ。あんまり気をつかわないでよ、御国ちゃん。あなたこそ今日は大変な目にあったんだから、ゆっくりと体と心を癒してね」
真理さんは自分のベッドをあたしに貸してくれて、自分は床に布団を敷いて横になった。

その夜あたしは夢を見た。
今よりも少し大人になった英知君が、真理さんと手をつないで二人で歩いている。
あたしは少し離れたところでそれを見ていて、声をかけたいけれど声が出ない。
二人はどんどんあたしから離れていって、ひとりぼっちのあたしはなんだか悲しくなって泣いていた。
「英知君～、真理さ～ん…うえっ、ひっく…遠くにいっちゃいやだよぅ…」
「はいは～い、もう大丈夫よ。御国ちゃん」
気がついたとき、なんとあたしは真理さんの布団の中で抱きしめられていたのである。
「かわいそうに怖い夢を見たんだね、御国ちゃん」
真理さんはあたしの頭を優しく撫でてくれた。
意識が覚醒し、あたしは布団の中で赤面した。
１８にもなってあたしはなんという失態を…。

翌日、警察から連絡があり、あたしが落とした財布は奇跡的に見つかり、事態は事無きを得た。

Ｓｅｘ抜きに、恋愛は成立するのか！

大学のすぐ近くにあるロフト付のお洒落なワンルームマンションにホームセンターで買った淡いオレンジのカーテンはあたしのお気に入り。
小物類はちょっと節約して１００均で調達。
明日はいよいよ入学式なわけで、はやる期待に胸を膨らませつつ、窓を開けて夜空を見上げると夜風が桜の花弁をそっと運んだ。

「ねえ、諏訪さん。もう履修教科決めた？」
入学式で隣に座った品川さんという女の子。
快活でいて、理知的。同い年なのにどうしてこうも自分と違うのか。だけどあたしは一目で品川さんを大好きになった。
今は大学のカフェテリアでお茶を飲みながら、一緒に履修教科を決めている。
「とりあえず、月曜の一限は一般教養の『西洋史１』ってのを履修しようかなって思ってるんだけど」
オリエンテーションで貰ったパンフレットとにらめっこしながら、あたしは品川さんにそう答えた。
「へえ、面白そうね。私もそれにしようかな」

品川さんは頬杖をつきながら、あたしの顔をじっと見る。
「ねえ、諏訪さん。彼氏いる？」
「い…いません、いません」
あたしはなぜだか赤面し全力で否定した。
品川さんの何もかもを見透かすような濃い茶色の瞳があたしを覗き込むと、なんだかどぎまぎしてしまう。
「うそ」
「うそじゃなくて…あの…ええっと」

あたしが本気で困っていると、品川さんはぷっと吹き出した。
「ああもう、可愛いなあ諏訪ちゃんは」
「あの…品川さんは彼氏いるの？」
そう問うと一瞬品川さんの顔が曇ったような気がした。
品川さんは白磁のコーヒーカップに視線を移し、小さく呟いた。
「彼氏だったら…いいんだけどね」

その日の午後は、品川さんと一緒に「女性の体と健康」という授業を受けることにした。
人気の講義らしく、１５０名入る大教室にはすでに多くの生徒が着席している。
やがて本鈴とともに教授が姿を現した。日によく焼けた女性の教授で、化粧っ気はあんまりないが、目鼻立ちの整ったなかなかの美人である。教授という肩書き上ある程度年齢がいっているといえばそうなのかもしれないし、若いといえば若いのかもしれない。そういうわけで年齢は不詳。
姿勢の良いしなやかな四肢によく映えるパンツスーツに身を包み、小脇になにやら小箱を抱えている。
「こんにちは～今日から半年間この授業を担当させていただきます、泉原です。で、今日は私のコレクションを持ってきました！」

自己紹介もそこそこに、教授は小脇に抱えていた小箱を開け皆にまわしはじめた。
一見シャンプーや化粧品の試供品みたいな包みに、英語やら中国語…中にはミミズののたつくような文字の羅列で何か書いてある。
「これって…」
隣で品川さんが意味ありげに笑う。
不意に先生がその箱の中のひとつを取り上げ、包装の袋を破いた。
なんだか中からゴム製の輪っかみたいなものがでてきて、それを皆の前に掲げて見せる。

「これ何かわかる？」
そして箱に一緒にはいっていた試験管に、器用にそれを被せた。
「先っぽに空気が入るから、先の部分は指で掴んで少し捻るのがコツよ」
そのリアルさにあたしはなんだか赤面してしまう。
実はあたしがその実物を見たのは、これがはじめてだった。
「実はこれ、私のコレクションで世界のコンドームなのです」
そんなツカミの後、講義はそのタイトルの通り、女性の体のメカニズムやら妊娠やらの話となっていく。だけどだからといって「Ｓｅｘするな」というんじゃなくて、「やるなら安全にやりなよ」というニュアンスで講義は進められていた。

黒板の板書をノートに写しながら、あたしの思考はＳｅｘに思いを馳せる。
あたしは幼い頃から、夫婦間以外でのＳｅｘは罪だとずっと教え込まれてきた。
キリスト教思想を抜きにしても、Ｓｅｘは夫婦間でやるものだとあたしは思う。
エイズや妊娠のリスクもあるし、不倫なんて不毛だと思うし。そもそも結婚したパートナーに浮気されたらその人はどんなにつらい思いをするだろう。
人は与えられた伴侶とともに性を営むのが一番平和で安全だと思うのだけどなあ。
だけど世界には一夫多妻の文化だってあるし…。
愛する人に自分のほかに奥さんがいたら、果たして嫉妬しないでいれるんだろうか。
なんてことを考えてみた。

授業が終わってから、思い切ってあたしは品川さんに聞いてみた。
「品川さんは彼氏とＳｅｘするの？」

品川さんはクスリと笑って答えてくれた。
「そりゃあ、するわよ」
「どうして？」
一瞬間があいて、品川さんは答えを探すようだった。
「好きだからよ」
あたしは小っちゃい子供みたいに、なおも尋ねる。
「どうして好きだったら、Ｓｅｘするの？さっきの授業でもいってたじゃん。いくらコンドームをしてたって、女の人は妊娠のリスクを負うわけでしょ？なのになんで簡単にＳｅｘを受け入れちゃうの？」
そう問うと品川さんは寂しそうに笑った。
「求められて応じてしまうのは、本当はその代償に彼の心が欲しいからかもしれない」
あたしはなんとなく不安になった。
「Ｓｅｘを抜きに、恋愛は成立しないの？あなたのことは好きだけど、結婚するまで待ってって…そんな恋愛はできなのかなあ？本当に相手を大切にするってそういうことでしょう？」
多分品川さん以外の人にこのことをいったら「何十年前の思想だって」あたしは鼻で笑われてたと思う。
だけど品川さんは笑わなかった。
「本当は、そんな優しい関係がお互いに築けたらいいのにね」
春の風があたしたちの間をすり抜けてゆく。
「でもね、知ってしまうと私も身体が求めちゃうの」
そういった品川さんの唇はなんだか妙に艶かしかった。

薔薇

１０代の女の子が数人よれば、話の内容は決まって恋バナ。やれ、彼氏がどうしたの、バイト先の先輩がどうのと、同じネタで何時間でもマシンガントークが展開される。なんとなく、あたしは視線を窓の外に移した。

今日は宿泊学習、大学挙げての一大イベントなのだ。新入生が早く馴染めるようにとの大学側の配慮で、一泊二日、市外のホテルを借りきってオリエンテーションが行われる。「大学デビュー」なのかなんなのか、皆がそれぞれ何かの期待を抱き、大学御用達の豪華なバス内は、異様な雰囲気だ。

「佐伯君てさ、彼女いるのかな？」

あたしの座席の真後ろに座る同じグループの市川紗江が、うっすらと頬を赤らめて呟くと、友人たちは大いに盛り上がり、やたらと市川をプッシュした。

「本人に直接聞いてみなよ、告白しちゃえって。せっかくのチャンスじゃん」

こんな密室で、なんてあからさまな。それこそ佐伯君はあたしの斜め前の席で、寝たふりを決め込んでいる。まあ、なんというか佐伯君は確かにイケメンだ。女の子雑誌で特集を組まれてそうな、人気アイドル並みの容姿。そしてそれを本人も自覚しているから、そういうモテオーラが全開している感じ。半径３メートル以内に近寄ったら、妊娠しちゃいそうだなとか思ってまじまじと佐伯君を観察すると、佐伯君の開くと音がでそうなほど長い睫が少し震えてる。なぜだろう？

「諏訪さん、俺の顔になにかついてる？」

「いや、あの…えっと」

さすがに気まずく、あたしは焦った。そんなあたしを見て、佐伯君は爆笑する。

「諏訪さんて、可愛いね」
奴は何気に爆弾発言をさらりと言ってのけた。故に後ろの座席の市川から物凄い視線を感じることになる。
目的地のホテルに到着し、オリエンテーションを終えると、夕食時までは自由時間ということなので、部屋に引き上げた。友人たちは荷物をほっぽりだすと、またこりもせず恋バナに興じている。そりゃ、あたしも興味がないわけじゃないんだけど、なんせ異性と付き合った経験がないから、少し引け目を感じる。なんとなくその場に居づらかったあたしは、このホテルの名物だという薔薇園を散策することにした。
アーケードに咲き誇る色とりどりの薔薇の花が、ほのかに湿り気を帯びた甘い香りを漂わせ、あたしは目を閉じた。少し陰った五月の夕暮れに、薔薇は人知れずその美しさを咲き競う。
「諏訪さん」
霧雨に少し煙って見える視界の先に、佐伯が佇む。
「諏訪さんって、花好きなの？」
「まあ、好きといえば好き、かな」
確かに花は大好きで、将来フラワーアレンジメントの学校に通いたいって思ってるくらいだ。だけど、なんだか花が好きだなんて、口にするとやたら乙女チックな子みたいで、あんまり言いたくなかったし、知られたくもなかったんだけど。あたしはデジカメで、ひとつひとつ薔薇を写す。

◇　◇　◇

「あっこれ、フレンチ・パヒュームだ。いい香り」
諏訪御国は、そういって薔薇に顔を埋めた。
甘ったるい薔薇の香りに酔ったんだ。本当はただそれだけだったん

だ。何をとち狂ったのか、俺は諏訪御国の長い黒髪に口付けた。なぜだかそれは、薔薇よりももっと美しく高貴なもののように思えて、官能的だった。それは未だ男を知らない、青く秘めやかな香りがした。案の定、諏訪御国は固まって赤面している。

「あああ…あの」

「なに？諏訪さん携帯教えてよ。俺たち同じ班でしょ。どうせ今日と明日と一緒に行動しなきゃならないんだし」

何食わぬ顔で、そういってやった。

露に濡れた熟れたそれに触れると、耐え切れず花弁がはらりと散った。

薔薇は美しい。高貴で気高くて、それでいて卑猥だ。

道化

気がつけば、視線が佐伯君を追ってしまう。体がなんかずっと火照っている感じ。
いや、いかん、あたし、しっかりしろ！そして思い出せ、自分は色気より食い気だったと…。ちょうどよいことに、今夜の夕飯はシッティング・ビュッフェ形式だ。食べて食べて…そして何もかも忘れてしまえ。
「今夜は、あたしガッツリいくから！」
あたしはそう明言し、所狭しと並んだ料理のテーブルに張り付いた。
「御国、ちょっと取りすぎよ。ちゃんと食べ終えてからまた取りにいけばいいじゃない」
さすがに隣で品川さんが、顔をしかめた。
「いいの、いいの。だってまた取りに行くの面倒なんだもん」
そういってあたしはスパゲッティを大量に口に放り込んだ。
「諏訪さん、よく食うなあ」
目の前に、佐伯君が座り、じっと自分を見つめているではないか。
一瞬、口に含んだスパゲッティーを吹きそうになった。
「そうよ、食べすぎよ。そんなことしてたら彼氏できる前にブタになっちゃうんだから」
佐伯君との接点を求めていた、市川が速攻で参戦してくる。
「いいもん、デブ専の彼氏作るもん」
あたしは口を尖らせた。さあ、ここでタッチ交代。このタイミングであたしはデザートを取ると称して席を立ち、市川にこの席を譲る。
これぞ奇跡の乙女の連携プレー。

「諏訪さんてさあ、彼氏いないの？」
この、すっとこどっこいがぁ。空気読め、空気。
ひとが、ナイーヴな欠点さらして道化を演じてるちゅうのに、何そ

の傷口に鋭利なナイフぐりぐりしてくれてんだ。ぼけっ！
「そうなの。御国ったら、今まで付き合ったことすらないんだって。今時ありえないよね」
市川！覚えとけよ。あんたもいつか簀巻きにコンクリート詰めで、東京湾に流してやるんだから！

――――汝、汝の敵を愛せよ――――――不意に脳裏にキリスト様が降臨した。
できるかっ！この状況で。
――――――右の頬をぶたれたら――――――
倍返しの鉄拳で黙らせる！

……ってできたらなあ。

「だったら、俺、立候補しようかな」
自信たっぷりの口調で、佐伯がそういった。
「嫌だなあ、からかわないでよ」
あたしは自分を制して、そういうのが精一杯だった。
そして、そそくさとその場を立ち去り洗面所で、ひとり泣くのだ。

洗面所の鏡に映る自分の顔が、ひどく滑稽に思えた。
人は皆、生まれたときから仮面をつけて自分を演じているのだという。
あたしは、我ながら上手く演じていると思うのだけど、時々その仮面がひどく疼く。
好かれる自分、相手の求めるあたし。それを演じることはたやすいのだけれど、そこに時々首をもたげる、本当のあたしが恐ろしくて仕方ない。
水道水で腫れた顔を冷やし、あたしはまた、あたしの仮面をつける。

傷ついた内面を隠すために、今日は思い切り道化の仮面をつけよう。
騙しきる自信はあるのだから。

洗面所を出た先で、佐伯が佇んでいた。
あたしは、下腹にきゅっと力を入れ、手のひらを握り締める。
笑えっ、あたし！
「やだなあ。佐伯君も食べすぎ？トイレで会っちゃうなんて、やっぱりクサイ仲？なんちゃって」
おどけたあたしを見て、一瞬、佐伯君の目に痛みが走ったように見えた。
刹那、手のひらがそっとあたしの顔を包んだ。
「諏訪さん、泣いたんだ？」

ばかっ、必至で築いた心の防御壁なんて、意味ないじゃんかよう。

しっとりとした雨が、少し冷たい夜の街を優しく抱きしめているみたい、などとぼんやりと下腹部を覆う鈍痛を感じながら、ふと脳裏に浮かんだバカみたいに乙女チックな思考を打ち消した。
友人たちはホテルの大浴場に行ってしまったが、あたしはどうやらアレがきてしまい、部屋でシャワーを浴びることにした。洗面室の鏡に、身体を映してみる。
今日のために新調した真新しい白いブラとショーツ。生理特有の饐えた匂いが鼻をかすめると、改めて自分が女であることを強く意識させられる。ブラをはずし、そっと胸の頂に触れると、つんとその薄桃色の先端をもたげた。
そっと瞳を閉じてみる。なんだか心の中がざわざわとして落ち着かない。
そっと佐伯が口付けた髪に触れる。まるで壊れ物を扱うように、佐伯が触れた頬にも触れてみた。
「なんで？」直接彼にそう問うてみたいと思う気持ちと、そんな彼の戯れを真に受けていると思われたくない、ちっぽけなプライドが交差する。

だけど、佐伯に抱かれる自分を想像した。
触れてみたいと思う。彼の髪に、頬に…そしてやわらかな唇に。
その硝子のような瞳に、あたしだけを映して欲しかった。
――――この男に抱かれてみたい――――
確かにそんな欲求が自分の中にあるのだと。

ショーツを脱いで、浴室にはいると太ももに生温かい感触がした。
どす黒い血液がひとすじ、蛇のように這っていた。
子を孕むため、女はこうして血を流す。それは遺伝子に組み込まれ

た、ひどく原始的な営みであるようにも思え、しかしそれは愛する男の子を孕むことができなかった、無念の血の涙なのかもしれない。性を営む本能を、あたしは罪だとも、汚らわしいとも思わない。それは多分人間の奥深くに眠る、かつて神が与えた楽園を懐かしみ、欲するという失われた記憶の片鱗であるかのようにさえ思えてくる。全てが神の御手のなかにあったとき、世界はこの上もなく、あたたかで、優しいものであったのだろう。そして人は、本当は心の奥底でそこに帰りたいと切望しているんじゃないだろうか。

服を着替え終えるころには、部屋が俄かに騒がしくなった。
「お帰り～」
髪を拭きながらあたしはバスルームからひょいと顔を出した。
浮かない顔の市川が、あたしを見つめている。
「御国、ちょっと来て」
フロアの中央に置かれている自販機で、あたしはミネラルウォーターを買った。
「なに？」
まあ、だいたい言われるであろうことは、予想がつくんだけどね。
「私、佐伯君が好きなの」
斜め４５度にあたしを見上げる視線が、妙に熱っぽい。
目尻の先に、涙が光ってるし。
ああ、女の子ってずるいなあ。
全部計算尽くだもんね。
「御国、協力してくれるよね」

『神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主に形造った人を置かれた。神である主は、その土地から、見るに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた』〈新改約聖書　創世記〉

神様ってさあ、なんで幸せな楽園に、善悪を知る木なんてわざわざ生えさせたんだろ？
そんな神様を、あたしは少し意地悪だと思った。

自覚

あたしへの牽制の後、市川の佐伯君へのアプローチは鬼気迫るものがあった。
胸にちりりと痛みが走らないわけではなかったが、諦める術もすでに心得ていた。分相応というものが、平和に暮らすためには最も必要なことなのだ。恋の三各関係なんて、まっぴら御免こうむりたい。だけど……。

ロビーで談話している市川と佐伯を遠目に、あたしはさっさと部屋へと引き上げた。
部屋では品川さんがベッドに寝っ転がって雑誌を読んでいる。
「三国～、佐伯君はやめときなよ～」
「はあ？　なに言ってんのよ。品川さん」
「あれは、あんたの手に負える男じゃあないわよ。すごく危険な感じがする」
「ああ、なんか半径３m以内に近寄ったら、妊娠しちゃいそうな感じするもんね」
今日はなんだかひどく疲れたような気がする。
私もぽふんとベッドに横になり天井に手をかざしてみる。
「はあ」
なんだか思わずため息がこぼれた。
「あらあら、随分と色っぽいため息ですこと。もう惚れちゃった……とか？」
「そう、かも……ね」
ただひどく疲れていた。
自分の心に仮面を被ることに。
「あはは……あたしバカだよね。佐伯君が好きだって気付いたとき

には、もう諦めなくちゃなんないなんてね」
今日のあたしはどうかしてる。
心が溢れて止まらない。
「品川さん……苦しいよぉ」
涙が頬を伝った。
とめどなく流れるそれは、ただ熱かった。
品川さんがあたしの頭をくしゃっと撫でた。
「ああもう……ほんとあんたはバカだよ。でもね、そう自覚してしまったんなら、自分の心を偽るのをやめな。きちんと全力で愛しきらないと、きっと次には進めない。市川に遠慮はいらない。お互いまだイーブンなんだから」

だけど、その授業料はいささか高くつきそうだ。と品川はその言葉を飲み込んだ。

「別にどうこうする気があるわけじゃなくって……その……。品川さんに聞いてもらってすっきりしちゃった」
あははと笑ってみる。
きっとあまりうまくは笑えていない。だけど、いつか心のそこから笑える日はきっとくるって信じてる。

失恋

中庭の新緑が眩しい。
あたしは英語の教科書から目を上げた。
中庭に置かれた白いベンチに、市川と佐伯君が腰かけて何かを話している。
胸を焦がす想いは幾分風化し、いや麻痺してしまったのかもしれない。
感情が動かない。

あたしは英語の教科書に向き合った。

人気のない午後の図書館の窓際。この場所が好きだった。現在格闘しているのはジーン・ウェブスターの『Ｄａｄｄｙ　Ｌｏｎｇ　Ｌｅｇｓ』の翻訳。連休明けまでに１冊分を仕上げるのが課題だった。それほど難しいものではないのだけれど、分量は結構ある。第二外国語で選択したドイツ語の翻訳の課題の提出日も迫っていることを考えると、あわやこれは連休を返上で取り組まねばならないかもしれない。

「ふぇ～ん。こんなの絶対終わらない～誰か助けて～」
そういってあたしは机の上につっ伏した。
「俺が教えてあげよっか？　ずっとイギリスで育ったし英語は得意だよ」
いつの間にか向かいの席に佐伯君が座って、情けないあたしの顔を覗き込んでいた。
「ちょっと佐伯君！」

声を荒げて市川が佐伯君の隣に座った。
なんだかお気に入りのペットを鎖でつないで、散歩させているおばさんを連想した。

市川の顔は優越感丸出しの笑みが浮かべ、佐伯君の腕に自身の腕を絡めた。
「私たち、付き合っているの」
頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を覚えた。
「そう……よかったわね。市川さん」
やっとのことでこの言葉を紡ぎだせた。

二人の背中を見送って、あたしは教科書を閉じた。
ため息を一つ、思考を切り替えようとした。
なんとなく、今日を一人で過ごすのは嫌だった。
誰かにそばにいて欲しかった。
図書館を出て、あたしは英知君に電話をかけた。
「もしもし」
英知君の声を聞くと、張りつめていた糸が切れてしまって、あたしは泣き出してしまった。
「ちょ……ちょっと御国ちゃん？」
「ご……ごめん。ちょっと色々あって……」
ひとしきり泣くと、あとは何だか照れくさくなった。
「すぐに行くから、今どこ？」
「学校のカフェテリア」

英知君の大学からうちの大学までは駅３つ分くらいしか離れていない。ものの１５分ほどで英知君は来てくれた。

カフェテリアがざわつく。
「ねえ、あれＫ大学の校章じゃない？　しかもゴールドだよ」

「超エリートじゃん。しかも顔もけっこうイケてるし」
英知君の通うK大学は超名門大学なんだけど、特に成績の優秀な上位１０名には金の校章が贈られる決まりがあった。なにか特別な行事があったのか、スーツ姿にきちんと金の校章を身につけている。

「御国ちゃん」
「英知君、その格好」
英知君はぱっと頬を赤らめた。
「あっと、ちょうど大学の学会の裏方を手伝っていて、そしたら御国ちゃんから電話きたもんだから」
「ごめん！　忙しかったのにほんとごめんね」
「構わないよ。仕事は友人に代わってもらった。それより……場所を移さないか？」
どうやら女子の好奇な視線に耐えきれなかったらしい。

英知君があたしの手を取って歩き出す。
背中がなんだか前より大きく見えて頼もしかった。
胸がトクントクンと高鳴って、暖かで優しい気持ちが溢れてくる。
「英知お兄ちゃん」
思わず呟いた。物心つく前からずっとこうして英知君はあたしの手を握ってくれていた。子供キャンプで迷子になった時も、真っ先に英知君が助けに来てくれて、こうして手を繋いで帰ってきた。虚勢や見栄や、そんなものを何一つ知らなかったとき、あたしは仮面を被る必要はなかった。ありのままに生きて、ただ溢れるほどの愛情を受けていた。遠く過ぎ去った過去は、なんと鮮やかに輝いているのだろう。
幸せだった。確かにあの時あたしは幸せだったのだ。

エントランスで市川と佐伯君にすれ違った。

佐伯の刺すような視線が一瞬英知君を捉え、秀麗な眉目に影を落とす。

心の墓標

アイスレモンティーの氷が、涼やかな音を立てた。
「どうぞ」
御国ちゃんの目はまだ赤い。僕は一口レモンティーを流し込んだ。
「で、なにがあったんだ？」
御国ちゃんは笑った。
「悲しい時に笑う癖、昔と変わらないね」
彼女がそれを言いたくないのなら、それでいい。

『泣くものと共に泣き、喜ぶものと共に喜ぶ』これも聖書にある言葉だが、慰めというのはこういうことを言うのかもしれない。
今はただ、その悲しみに寄り添う。
心が同調するのなら、言葉などいらない。

「えへへ。英知君が来てくれたから、もういいや」

はぐらかされた。
そんな気がした。
これではその悲しみに寄り添うことはできない。
ここからは入れないのだとはっきりと線を引かれたようだった。
彼女は泣いている。
ずっと彼女を見続けてきた僕だからわかる。
彼女は悲痛なほどに泣いている。

――――なら、なぜ君は僕を呼んだ？――――
その細い手首を捕まえて、そう問うてみたかった。

「ねえ、英知君せっかく来てくれたんだからさあ、勉強教えてよ」

「え？　ああ、うん。いいよ」
そう問えなかったのは自分へのエゴだ。
彼女に嫌われるのが恐かった。

僕は右手につけたリストバンドを見た。
ＷＷＪＤの文字が編みこまれている。
これは「Ｗｈａｔ　ｗｏｕｌｄ　Ｊｅｓｕｓ　ｄｏ？」という言葉の略である。主に青年のクリスチャンがリストバンドやアクセサリーにこの文字を彫り、好んで身につけている。常に「イエス様だったら、どうするか？」の視点に立ち行動できるようにと自戒するのである。

僕は短く心の中で神様に祈った。
それがクリスチャンの僕にとって、彼女の為にしてあげられる最大のことだった。

――――自分の思いではなく、あなたの御心がなりますように――――

我ながら、不思議な祈りだと思う。
そう思うとキリスト教とは「死ぬ」宗教なのだ。新約聖書の福音書に『誰でも私の弟子になりたいのなら、自分を捨てて自分の十字架を負い、そして私についてきなさい』という言葉がある。クリスチャンは罪人だ。正確には自分の罪を自覚した人たちなのだ。キリストを信じても、罪を全く犯さなくなるわけではない。だからその罪を神の前に持っていく。そして死ぬのだ。毎日、毎分、毎秒、キリストの十字架を想い、死ぬ。
そんなとき、僕は一面に立つ無数の墓標を思い浮かべる。そこに葬られている僕の罪の思い。僕はもう何度死んだことか。だけど自分に死ぬと楽になる。穏やかで平安な気持ちになることができる。だ

からきっといつの日にかやってくる本当の肉体の死を恐れることはない。まあ、死に至るまでの苦痛は恐いのだが。

「へえ、ジーン・ウェブスターの『足長おじさん』かあ」

僕は御国ちゃんが持ってきた教科書に目を通した。

英知の罪

「足長おじさんってさあ、なんで最後の最後にならなきゃジュディーに会ってくれなかったんだろう。ジュディーは何度も会いたいって手紙で伝えたのにね」

御国ちゃんはテーブルに頬杖をついた。

「ジュディーが気がつかなかっただけさ。本当は何回も彼女と会っている」

僕はＤａｄｄｙ－Ｌｏｎｇ－Ｌｅｇｓの英文に目を通した。この程度なら辞書などなくても訳せる。

「でもさ、残酷だよ。孤児だったジュディーがどれだけ愛情に飢えていたか。そりゃ足長おじさんのおかげで大学に進学するという幸運に恵まれたんだけどさ。やっぱり期待しちゃうじゃない……こんな自分でも愛してもらえるのかもって」

僕は視線を上げて御国ちゃんを見た。

御国ちゃんはまた泣きそうな顔をして笑っている。

「ホームシックかい？　なんだやたらと愛にこだわってるね」

「うん？　まあ、ちょっとそうなのかも。お父さんやお母さんに……会いたいな」

そう呟くと眠くなったのか、御国ちゃんはうとうとと船を漕ぎはじめた。そのうちテーブルにつっぷして静かな寝息を立てはじめた。幼子をみつめるような暖かく優しい気持ちが溢れた。愛おしい。今

も昔も変わらず、僕は彼女を愛している。そんな自負があった。一生彼女を愛し守っていけたらどれだけいいだろう。

頬に張り付いた髪に手を伸ばし、そっと払ってやる。不意に触れた色白の頬は思ったよりも柔らかく、鼻腔をくすぐる甘い香りがした。

心臓が跳ねた。
反射的に少し距離を置く。
身体を突き抜ける衝撃。
不意に目覚めた欲望という名のどす黒い感情を自分はどう制していいのかわからなかった。
ああ、乗っ取られてゆく。
そう思った。

視界が彼女の足を捉えた。正座を崩した彼女のスカートの裾がみだれ、あられもなく白い太ももが剥きだしになっていた。

「あっ」
僕は思わず小さく叫んでしまった。
記憶がフラッシュバックする。
消そうにも消せない罪の記憶の映像が断片的に意識に流れ込んでくる。

木造の礼拝堂にあるキリストの磔刑像と赤いワンピースの少女。

英知の手が、情けないほどに震えた。

「あ……ああ……」

――――僕はここにいちゃいけない。――――

そう思ったら、涙が溢れて止まらなかった。
僕には彼女を愛する資格なんてない。
ふと両手を見つめる。
ああ、そうだった。
僕のこの罪に汚れた手では彼女に触れることは許されないのだ。

「ごめん。ごめん……ね。御国ちゃん」

声にならない嗚咽とともに、僕は何度も御国ちゃんに謝っていた。
涙の滴が数滴、御国ちゃんの頬を濡らした。

僕は上着を取り足早に御国ちゃんの部屋を去った。

棘

自室のベッドに腰掛け、英知は膝を抱いた。もうとっくに日は暮れているのに、照明をつけようともしなかった。
頬を伝う涙は枯れることをしらない。
腕を解き、ベッドに身を横たえた。
沈んでゆく身体とともに、追憶の闇に意識が呑まれた。

木造のこじんまりとした礼拝堂に、キリストの磔刑像が悲しく自分を見つめていた。故郷の教会。自分は中学2年生くらいだったろうか。赤い小さなワンピースを新調してもらい、少女は嬉しそうにそれを僕に見せにきた。僕と彼女以外にはそこに誰もいなかった。
彼女は小学1年生になったばかりだった。髪の長いお人形のように愛らしい少女。不意に僕の中に沸き起こったどす黒い感情が渦をまく。

「ねえ、お兄ちゃんに抱っこされないか？」

そういうと、少女は嬉しそうにすこしはにかみながら、ちょこんと僕の膝の上にすわった。意外と肉付きがよく、あの時も乱れたスカートの中から白い小さな太腿が覗いていた。
僕は薄く笑い彼女のワンピースをたくしあげた。
露わになる小さな下着にそっと手を滑らせた。

「おにいちゃん……はずかしいよぅ」
少女は泣きそうな声を出した。
「大丈夫だよ。だけどこのことは絶対に誰にも言ってはいけない」
そう口止めをすると、少女は青ざめた顔をして小さく頷いた。

少女はこのことを誰にも言わなかったらしい。
だけど、それ以後僕は彼女の存在に恐怖した。

しばらくして彼女は、彼女の父の転勤でどこか遠くに引っ越していったのだが、それでも心が休まることはなかった。

僕は罪人だ。
少女が僕の前からいなくなっても、この罪悪感は決して消えることはない。
そして犯してしまった罪を自分では償うこともできない。
死を望んだことも一度や二度ではない。
だから縋った。
幼いころから聞かされ続けたキリストの神に。
神の御子でありながら、人として生まれその罪を負いキリストは十字架につけられたという。
「いいかい、よくお聞きなさい英知。たとえどんな罪びとであってもキリストの救いをその心に受け止めるなら、許されるのですよ」

牧師である父が、よくそういって僕の頭を撫でながら話してくれたのだけれど、『キリストの救いをこころに受け止める』とは一体どういうことなのか、僕にはよくわからなかった。だけどその許しに縋らなければ生きてはいけないと、僕にははっきりとわかっていた。
人のいない礼拝堂でずっと泣きながら祈り続けた。
祈りは、格闘だった。
僕は泣きながら自分の罪を悔いた。どれだけ悔いても、自分が許されているという実感はまったくなかった。
そして気付く、許されることを心のどこかで頑なに拒んでいる自分の存在があったことを。そこに暖かな一筋の光があたった。
脳裏に浮かぶキリストの磔刑の場面。

想像を絶する苦しみの中で、キリストが僕に向かって笑った。
「もういい。お前の苦しみは私が引き受ける」とそう語ってくれたようだった。
涙が溢れて止まらなかった。
だけど涙は苦くはなく、暖かなものだった。
夜明けのきらきらと輝く太陽の光に闇が溶けた。
不意に心の中に、生きようという意欲がわいた。
「あなたが、僕を許してくれるのなら、僕の人生はあなたに捧げます」
そう祈った。
僕は父が牧師だからという理由で献身したわけじゃない。キリストに出会い罪許されたものとして、確かにそこに立ったのだ。

だけど、今日僕は確かに御国ちゃんに対して情欲を抱いた。
それはキリストの愛とは程遠いものに思われた。
6年前に抱いた少女への汚らわしい思いと、なんら変わることはなかった。

神の前にも、御国ちゃんの前にも堂々と立つ自信が、今の僕にはなかった。

許し

「開けてよ、ねえ、英知君、開けて！」
部屋の扉を必死に叩き続けたけど、英知君は扉を開けてはくれなかった。
「ごめん、御国ちゃん……悪いけど帰ってくれないか？」
扉の向こうから英知君の声がするけれど、それはひどく辛そうだった。
「どうしたの？　英知君。体調悪いの？」
「ああ、少しね。だからこれから少し眠るよ。大丈夫だから御国ちゃんはもう帰って」
隔てられたのは扉ではなくて、心だと思った。
身体を預けた鉄の扉がひどく冷たく感じられて、寂しかった。
「うん……わかった。じゃあ帰る……ね」
あたしは必死で涙をこらえてそう言うのが精いっぱいだった。
帰り道、あたしは前に英知君から手紙をもらったことを思い出した。
英知君はあたしのことを好きだといった。
だけどその頃のあたしは、その気持ちが重くて、貰った手紙を封さえ開けずに燃やしてしまったのだ。
痛みに仰け反るようにして一瞬のうちに灰になってしまった英知君の手紙。
その光景が瞼裏に鮮明に思い出されて、あたしは涙が溢れた。
「あたしは……ばかだ」
他人の気持ちは平気で残酷に踏みにじる癖に、それでいて拒絶されたら傷つくだなんて虫のいい話だ。
そう思うと、泣きながら渇いた笑いが込み上げてきた。
それはどこまでも空虚で救いのない笑いで、しかし幾分は罪意識にひきつれる心の痛みを麻痺させてくれもした。
「神様は見ていたんだよね。きっと……だからあたしが佐伯君に失

恋するようにされたんじゃないかな？」
それでも手紙を燃やされた英知君の心の傷よりは、はるかにマシなのだと思う。
罪を犯してしまったのなら、人は一体どうしたらいいんだろ。
どうやってその罪を償えばよいのだろう。
見上げた夕焼けの空は、まるで血のように赤かった。
「神様、あたし……罪人なんです……」
どうしようもなく苦しくて、あたしは空に向かって呟いた。
「大切な人を傷つけてしまたんです。でも、どうしたらその罪が償えるのかわからなくって、悲しくて、痛くて、辛いんです」
その時、通りの向こうからあたしを見つけて駆け寄ってきてくれた人がいた。
「御国ちゃんじゃない。どうしたの？」
真理さんだった。
真理さんは泣きじゃくるあたしの顔を心配そうに覗きこんだ。
あたしは真理さんに今までのことを全部話した。

◇　◇　◇

「罪……ねえ」
公園のベンチに腰かけて、真理さんは小首を傾げてみせた。
「御国ちゃんの罪を許すために、キリストは２０００年前に十字架にかかって死んでくださったんじゃない」
真理さんはなんでもないことのようにさらりと言った。
「あなたはそれを神様ありがとうといって受け取ったらいいだけなのよ」

すでに許されている、そのことをただ受け取ればいいだけ。
「受け取りたいです。でも理屈じゃよくわからないんです」
「そうね。確かに理屈じゃないのよ。これは」
真理さんは腕を組んで、少しの間目を閉じていた。
「祈ってるわ。あなたがそれを受け取れるように」
そういって、あたしは真理さんと別れた。
駅の前で、やたらと元気のいい男の子が古びたギターを弾きながら、
これ以上ないくらいに嬉しそうに歌っていた。
きっと英知君と同じ大学の神学部の学生だろう。
それはゴスペルソングだった。
「神の愛とイエスの十字架で心裸にされた
　僕のすべてで神様を見上げてありのまま生きよう

僕の心のうちにある黒く穢れた服を　愛の血潮の雨で洗い流された
　弱い自分を着飾って無理して傷ついて　深く刺さった罪の針をあなたは抜かれた

神の愛とイエスの十字架で心裸にされた　僕のすべてで神様を見上げてありのまま生きよう」

その歌声にとらえられて、あたしはその場から一歩も動くことができなくなっていた。自分の意思とは関係なく涙があふれてくる。
空っぽで空しかった心が熱くなって、あたしはばかみたいに泣いている。
恥ずかしいじゃん。
こんなのやだ。
そう思うのだけど、涙は止まらなくて、心は必死に叫んでいた。
「神様あたしはあなたのことを信じたいです」
黄昏はやがてコバルトブルーに色を変え、一番星が煌めいていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6986k/

平成キリシタン物語

2011年5月7日08時43分発行